



## 「型染め一途」

みつ はし きょう こ  
三橋 京子

1946年(昭和21年)  
江東区深川生まれ、  
西小松川町在住



### ■ 染め工場に嫁いだ

型染めの仕事に魅せられたのは、結婚前初めてこのちに連れられてきて、仕事場を見せてもらった時でした。「なんて素敵なお仕事なんだろう」って思いましたよ。江戸時代から代々受け継がれている、型紙の説明までしてくれてね。型紙あってこそこの仕事なんです。まず、型紙に彫られた切り絵のような図柄を、色を付けた防染糊で生地<sup>の</sup>に写し取る、これを「型付け」と言います。それから糊の付かなかった部分に、染料を挿して染めていくわけです。

子どもの頃からわたしは着物が大好きで、こっそり母の着物を羽織っては、鏡に映して遊んでいました。「どうやって染めてるのかな」っていう、関心はあったんですよ。

西小松川の三橋染工場へ嫁いできたのは22歳の時、昭和43年11月でした。もう結婚翌日から、主人と一緒に型染めの修業ですよ。

大学を卒業したばかりの主人は、勉強が好きだったので学校の先生の道に進みたかったと思うんです。でも両親がもう高齢だったから選択の余地がなくて、跡を継ぐしかなかったんじゃないかな。いっしょうけんめいこの仕事をやりました。気持ちの優しい人だったから、わたしに怒ったことも減多になかったですね。

当時の三橋染工場は、住み込みや通いの職人を40人くらい抱えていました。全盛期でした。五代目の義父は、職人を呼んで「こうしなさい」って指示していただけで、あまり現場で仕事はしなかったの。

うちの染めは、義父の代から琉球紅型<sup>りゅうきゆうびんがた</sup>といって沖縄伝統の染めの手法を取り入れて、東京風の色合いにアレンジした独特な色使いが特徴なんです。

### ■ 深川生まれ

昭和21年12月、6人きょうだいの4番目、3女として深川の小さな呉服屋に生まれました。深川は大空襲で焼け野原になってしまったけど、親戚の助けもあって、戦後すぐ再建できたそうです。

京子という名は、富岡八幡宮の官司さんが付けてくれたの。路上でおまごどや石蹴りをして遊ぶ、細くておとな

しい女の子でした。食べ物には困らなかったけど、ぼろは着てたかな。おかつば頭で、膝がすれちゃってるコーレテンのズボンと下駄を履いている写真が残っています。

呉服屋では、各地から反物を取り寄せた問屋<sup>つづら</sup>が、葛籠<sup>おちやちぢみ</sup>を背負って売りにきたんですよ。織物は新潟<sup>うえだつづき</sup>の上田紬、あと九州のものもあったわね。お得意様によって好みがありますから「あそこのお客様にはこういうのを勧めたらどうか」って、両親が品定めしながら仕入れていました。忙しい母に代わって、一番上の姉が子どもたちの面倒をみてくれたの。教科書に表紙を付けて名前を書いてくれたのも姉だったのよ。

戦時中、父は軍隊で横須賀の戦艦に配属されていたの。帝国ホテルのクックさんもいて、士官のための料理係を一緒にやったそうで「その人に習ったんだ」って、カレーをよく作ってくれてね。でもわたしには、あんまり美味しいとは思えないものでした。

東京大空襲を父は横須賀の洋上から見ていて、「東京方面がずーっと一面、真っ赤だった」と言っていました。上官から「骨を拾いに行行ってやれ」と許しが出て、いたるところ亡くなった人が転がっていた深川に帰ったのだと。近所の人からうちの家族が茨城へ疎開したことを聞いて、ひとまず安心して戦艦に戻ったんだそうです。戦終から3ヶ月経った頃、突然父が疎開先に帰ってきた姿を見た姉は、「あんなに嬉しかったことはない」と、話していましたね。

中学の頃、バレーボール部に入って体力がついたのか、高校卒業までの6年間は皆勤賞でした。その後、デザインスクールに通いました。家にいると店の手伝いをさせられるから、学校へ行った方が楽しかったの。

### ■ 看板を背負う

昭和55年でした。ある日突然、警察と病院からいっぺんに電話が入ったんです。営業に出かけた先で、主人が倒れて病院に運ばれたって。熱があっても休まない人だったから、過労だったのよね。そのまま亡くなってしまったの。まだ30代で丈夫でしたから、まさかこんなことになるなんて。心の準備が全くなかったの。いつまでも泣いていられなかったですよ、このうちを支えていかなきゃなんない

から。子ども2人はまだ小さいし、年<sup>りょうしん</sup>老いた義父母もみなくちやならない、外へ働きに出ることも難しい。そうになったら自営しかないんですよ。わたしの本格的な型染めの修業が始まったのは、この時からです。

特に「型付け」は、訓練<sup>かたき</sup>が要るんです。昔<sup>かたき</sup>氣質の義父からは怒鳴られて、身をすくめながらやっていました。6mもある板の両面に、一反の生地を動かさないように貼り付けて行うので、作業場は「板場」と呼ばれています。なにせ相手が紙と糊でしょう、ヘラで付けていくんですけど、ふにゃふにゃしているから手応えがないのよね。しかも型紙毎にそれぞれ癖があるから、ヘラの送りも変えなくちゃいけない。



◆板場で型付けをする三橋さん

気難しい職人たちが教えてくれるってことはまずなかったから、所作を見て覚えめました。染物屋は男社会なので、板場には「女は入っちゃいけない、女に何ができる」という風潮があつて。実際、重い板をひっくり返す力が必要な、男の仕事なの。でもくじけなかったです。板場を使えるのは職人が帰った後、義父には内緒で夜中に型付けの練習をしました。義父が気付いて起きてきて、「体こわすからやめなさい」とよく言われてね。続けているうちに「なんとかなくちや」というわたしの気持ちが分かったのか、だんだん言わなくなりました。義母は心底優しい人だったので、子どもたちの面倒をよくみてくれたの。

時代はすっかり洋服を着る傾向だったので、着物業界全体がじわじわと沈み始めていたの。2回のオイルショックも追い討ちをかけた。問屋が1回に引き取ってくれる反数が、以前は100反だったのが50反になり、20反になり、毎月だったのが半年に1回にまで減ってしまつて。うちも職人たちを手放さざるを得ない状況になって、とうとう義父と2人だけになってしまいました。

再び板場に立つようになった義父が、「こうやるんだよ」と型付けを初めて見せてくれたんです。もう、ヘラの運びが違う、この時「この人は天才なんだ」と思いましたね。

時々「絵羽模様」といって着物に絵を描くような、大柄の模様を手がけることがあります。絵羽は仕立てた時に縫い目の柄が合わないと、値打ちが無くなるの。まず白生地の段階で、着物の状態にザクザクと仮縫いして模様のあたりを付けます。それをほどこいて、また元の一<sup>はら</sup>反の状態に並べて、あたりを付けたところを頼りに型付けしていく特殊な技法なの。3ヶ月位

かかりますよ。上がり<sup>あがり</sup>の状態<sup>じょうたい</sup>で成功か失敗が分かるので、失敗に終わった時はかなり落ち込みますね。でもよくよしいので、早く気を持ち直しています。

平成2年、義父が89歳で亡くなりました。晩年には「いっしょうけんめいやってくれてありがとうね」と、言葉が変わってきたんですよ。

それから2年間「どうしようかしら」とって思い悩んでね。うちが盛大だった時も知っているし、どん底のように厳しくなったことも分かっていましたから。でも、「少しは盛り返せたら」とって思いが、強かったんですよ。独り立ちしようって。江戸型小紋六代目「三橋工房 三橋京子」の看板を背負うことを決心しました。

江戸川区の「えどがわ伝統工芸産学プロジェクト」は、平成15年に始まった時から参加しています。美大生のデザインを、職人が作品に仕上げていく企画です。作品を見に来られた百貨店の方から「職人展に出てほしい」という依頼を区が受けたので、何人かの職人たちと出店したんです。その時に百貨店のバイヤーさんから直接名刺をいただいて、「今後も出店してみませんか」と言われたの。お電話してみたら、バイヤーさん2人がうちに、仕事をしている現場を見に来られました。それから百貨店で、年に何回か単独で販売できる仕事をいただけるようになったんです。わたしも自分に発破をかけて、呼ばれる度に少しずつ新しい商品も作り、車に積んで持って行くようになって、もう10年になりますね。



◆「室町鉞」の小紋柄

## 伝統をつなぐ

トレードマークになっている「室町鉞」の小紋柄は、江戸時代に初代が考案した握り鉞の図柄なの。代々受け継がれて、続いてきたってことは魅力があるからで、求めてくださる方がいらっしやらないと、そこで終わってしまう。だから新しいことへの展開も必要だと思うんです。

百貨店では、お客様との会話の中からも「こういうものをお探しなんだわ」と、新しいアイデアが浮かんでくるんですよ。

2年前に教職の道を歩んでいた娘が「そろそろ親孝行するか」とって、講師を辞めて、跡を継いでくれることになりました。やってみようという気持ちが、嬉しかったですよ。弟子も1人「本格的にやってみたい」と頑張ってくれています。

ご縁があつてこのうちに嫁いできてからが、わたしの人生なんです。今まで健康でやってこられたのも、きっと主人が見守ってくれていたんだなあと思ってね。ここまでできたら、後はぼつぼつやっていこうと思って。先代から「地味に堅く」と言われてい

